2016年度　石川県立看護大学学内研究助成報告書

『多胎児用母子健康手帳』作成に向けて

全国多胎サークル代表者へのニーズ調査結果
および全国3地域での多胎育児支援事業報告

石川県立看護大学　健康科学講座
大木秀一

ご　挨　拶

多胎育児の負担が大きいことはこれまでの数多くの調査研究からも明らかです。現在、年間に出産する女性のおよそ100人に1人が多胎児の母親となっています。毎年、同じだけの多胎家庭が誕生しています。このような状況で同じ経験をした親たちが集まって様々な経験を共有し、育児に対する知恵を出し合っていく多胎サークルの存在は貴重です。平成27年度に引き続き全国の多胎サークルにご協力いただき、利用者のニーズに沿った多胎児用母子健康手帳作成を目指して調査を行いました。皆様からの多くの情報、ご意見や励ましに感謝しております。

今年度実施した研修会･講演会の記録をまとめました。様々な活動をしている多胎サークルの存在を知ることで、日々の多胎育児の励みになればと思います。今後は、多胎サークル同士がつながりを持ち、ユニークな取り組みを共有したり、運営上の課題の解決に向けて連携を取れるように働きかけていきたいと思います。

多胎サークルの会員に対する調査にも多くの皆様にご協力いただきました。調査の分析も現在進めておりますので、改めてご報告させていただきます。

2017年2月

大木　秀一

〒929－1210　石川県かほく市学園台1－1
石川県立看護大学　健康科学講座
E-mail：sooki@ishikawa-nu.ac.jp

研　究　組　織

研究代表者：大木　秀一
共同研究者：彦　　聖美（金城大学／石川県）
研究協力者：糸井川誠子（NPO法人ぎふ多胎ネット理事長／岐阜県）
金森　聖美（多胎育児サークルハッピーキッズ旭川支部代表／北海道）
髙山ゆき子（多胎児サークルころころピーナッツ代表／静岡県）
天羽千恵子（ひょうご多胎ネット代表／兵庫県）
中村由美子（双子・三つ子サークルグリンピース代表／佐賀県）
山岸　和美（NPO法人いしかわ多胎ネット理事長／石川県）

目　次

1. 調査の概要と今回の報告書について …… 1
2. サークル代表者調査の結果 …… 1
3. 研究協力者と共に実施した事業
1）「双子が多い町から子育てしやすい環境作りを目指して
～全国の双子の育児支援と保育･教育～」研修会（北海道鷹栖町） …… 9
2）「多胎児ファミリー応援フェスタ」（静岡県浜松市） …… 11
3）「多胎の子育てしやすい環境づくりを目指して ～講演会･勉強会～」（佐賀県佐賀市） …… 14
■講演要旨　「多胎家庭への支援はなぜ必要か」　大木秀一 …… 17

1．調査の概要と今回の報告書について

2015年に実施した、全国の多胎サークルに対する調査では「正確なデータや情報に基づいた多胎育児用のガイドライン（指針）」に対するご要望が数多くありました。2016年の調査は、そのご要望に応えたいと思い実施したものです。今回は、全国6地域の経験豊富な多胎育児支援者（研究協力者）と協働し、2つの調査を実施しました。

1つ目は、多胎サークルの代表者に対する質問紙調査です。2015年の調査に参加してくださったサークルに対して依頼状を郵送し、調査参加への意向確認と「多胎児用母子健康手帳」に関するニーズ調査を同時に行いました。

2つ目の調査は、参加の意向を示してくださったサークルの会員である多胎家庭の皆様に対する質問紙調査（発育等調査）です。調査票は、各サークルから手渡しまたは郵送で配付し、会員各自から返送していただきました。そのデータを基に、実用的な『多胎児用母子健康手帳』の試作を目指しました。

今回の報告書は、研究協力者（多胎児の母親）の視点から分析の項目を考えて研究者が集計しました。また、本文の執筆も研究協力者が行い、研究者が全体的に監修する形をとりました。このような形で報告書を作成することで、より当事者目線の報告書が出来上がったのではないかと思います。

会員への調査票は現在も回収中のため、今回の報告書はサークル代表者への調査結果と、研究協力者と共に実施した多胎育児支援の研修会・講演会等の事業についてご報告します。

2．サークル代表者調査の結果

1 調査の実施時期、送付数、返信数、調査参加数

調査は、2016年6月～7月に実施しました。都道府県別の送付数と返信数、参加件数は、右の表のとおりです。

2015年の調査に参加してくださった38都道府県のサークル140団体に依頼状と調査票を送付し、121団体から返信をいただきました（2016年10月14日現在　回収率86.4%）。そのうち、調査研究への参加の意向を示してくださったのは、98団体でした（参加率81.0%）。

返信された121団体のうち、昨年の調査後に、代表交代が12件、サークル名称変更が2件、名称と代表の変更が1件、連絡窓口である支援機関の変更が1件、活動の休止が3件と、合計19件でサークル情報の変更がありました。全体の15.7%で変更があり、多胎サークルの情報把握の難しさが改めて感じられました。

サークル所在地	意向調査送付数（通）	代表者調査返信数（通）	会員調査参加数（件）
北海道	5	5	4
青森県	3	3	3
岩手県	1	0	0
宮城県	3	3	3
秋田県	1	1	1
山形県	1	1	1
福島県	2	2	2
茨城県	2	1	0
栃木県	3	3	3
群馬県	2	1	0
埼玉県	4	3	2
千葉県	2	2	2
東京都	8	5	4
神奈川県	5	3	1
新潟県	1	1	0
富山県	0	0	0
石川県	4	4	4
福井県	1	1	1
山梨県	0	0	0
長野県	4	4	3
岐阜県	7	7	7
静岡県	4	3	3
愛知県	5	4	3
三重県	0	0	0
滋賀県	4	3	3
京都府	4	3	2
大阪府	13	10	6
兵庫県	18	18	15
奈良県	1	0	0
和歌山県	1	1	1
鳥取県	1	0	0
島根県	0	0	0
岡山県	1	1	1
広島県	5	5	5
山口県	4	3	2
徳島県	0	0	0
香川県	3	3	2
愛媛県	4	4	4
高知県	0	0	0
福岡県	6	6	5
佐賀県	1	1	1
長崎県	0	0	0
熊本県	0	0	0
大分県	1	1	1
宮崎県	1	1	1
鹿児島県	4	4	2
沖縄県	0	0	0
計	140	121	98

2 回答者の内訳と分析対象

回答者の121人中109人（90.1%）が多胎児の親でした。残りの12人（9.9%）は多胎の会の開催や連絡先窓口になっている子育て支援センター、児童館、ひろば、行政などの担当者でした。今回は、多胎児の年齢によって、0～6歳の未就学児（61人）を「未就学群」、6歳以上の児（48人）を「就学以上群」に分けて分析しました。

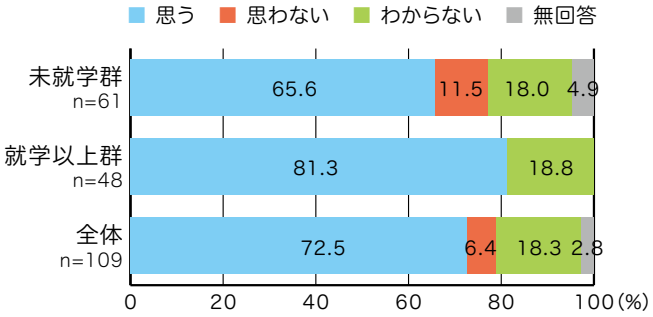
未就学群は、乳幼児健診や予防接種などで比較的母子健康手帳の

使用頻度が多く、就学以上群は、現在母子健康手帳をあまり使用しなくなっていると思われます。また、多胎児の親以外（12人）を「支援者群」としました。

3 多胎児用母子健康手帳への希望

「多胎児用母子健康手帳があれば良いと思いますか？」の問いに、「思う」と答えたのは全体で79人（72.5%）でした。未就学群では40人（65.6%）、就学以上群では39人（81.3%）でした。一方「思わない」と答えたのは、未就学群で7人（11.5%）、就学以上群では0人でした。「わからない」と答えたのは全体で20人（18.3%）であり、未就学群でも就学以上群でもほぼ同じ割合でした。

「思わない」と答えた7人は、母子健康手帳の記入欄が不足したり、記入しづらいと感じたことはないと回答しています。しかし、多胎児用母子健康手帳を作る場合、「どのような多胎に関する情報が必要か」、「追加して欲しい項目は」といった問いにはほとんどが回答しているので、記録欄については現状で満足しているが、多胎に関する情報はあった方が良いと考えていることがうかがえました。



多胎児用母子健康手帳があれば良いと思いますか？

4 多胎児用母子健康手帳に必要な情報

多胎児用母子健康手帳を作る場合に必要だと思う多胎に関する情報について、最も必要だと思うものを3つ選んでもらいました。全体では、1位が「制度や社会資源の情報」62人（56.9%）、2位は「妊娠の進み方」と「妊娠中の過ごし方や注意」45人（41.3%）でした。4位は「育児・家事の工夫」43人（39.4%）、5位「月齢・年齢別の育児の様子」36人（33.0%）でした。

未就学群と就学以上群を比較すると、どちらも「制度や社会資源の情報」が1位でした。未就学群の2位は「育児・家事の工夫」が25人（41.0%）、3位が「妊娠中の過ごし方や注意」22人（36.1%）、4位が「妊娠の進み方」21人（34.4%）、5位が「月齢・年齢別の育児の様子」17人（27.9%）でした。

就学以上群の2位は「妊娠の進み方」24人（50.0%）で、3位が「妊娠中の過ごし方や注意」23人（47.9%）、4位が「月齢・年齢別の育児の様子」で19人（39.6%）、5位が「育児・家事の工夫」18人（37.5%）でした。

1位の「制度や社会資源の情報」を挙げている人は半数を超えていました。利用したい（利用できる）制度がなかったり、情報が収集できないなど、個人の努力では限界があるがゆえに選択され、必要とされていることがうかがえました。

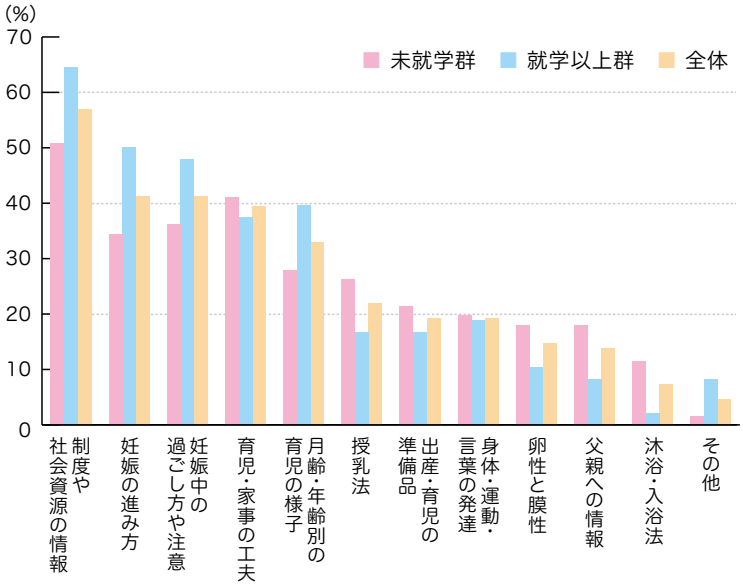
多胎児用母子健康手帳に必要だと思う情報（複数回答）

	未就学群 n=61			就学以上群 n=48			全体 n=109		
	順位	（人）	（%）	順位	（人）	（%）	順位	（人）	（%）
制度や社会資源の情報	1	31	50.8	1	31	64.6	1	62	56.9
妊娠の進み方	4	21	34.4	2	24	50.0	2	45	41.3
妊娠中の過ごし方や注意	3	22	36.1	3	23	47.9	2	45	41.3
育児・家事の工夫	2	25	41.0	5	18	37.5	4	43	39.4
月齢・年齢別の育児の様子	5	17	27.9	4	19	39.6	5	36	33.0
授乳法	6	16	26.2	7	8	16.7	6	24	22.0
出産・育児の準備品	7	13	21.3	7	8	16.7	7	21	19.3
身体・運動・言葉の発達	8	12	19.7	6	9	18.8	7	21	19.3
卵性と膜性	9	11	18.0	9	5	10.4	9	16	14.7
父親への情報	9	11	18.0	10	4	8.3	10	15	13.8
沐浴・入浴法	11	7	11.5	12	1	2.1	11	8	7.3
その他	12	1	1.6	10	4	8.3	12	5	4.6

2位以下の順位は、未就学群と就学以上群で差がありました。これは、未就学群は育児中の当事者の立場から身近に必要だと感じたことを回答し、就学以上群は、サークル代表という支援者の立場でよく聞かれる内容のうち、現行の母子健康手帳には掲載されておらず、「あれば良い」と思うものを挙げており、立場の違いによるものではないかと考えられました。

「妊娠の進み方」、「妊娠中の過ごし方や注意」、「育児・家事の工夫」については、全体で約4割近くの人が挙げていました。これらの情報は本やインターネットでも収集でき、また妊婦健康診査でも医師や助産師から知り得る内容です。しかし、母子健康手帳にも予備知識として挿入して欲しいと望まれていました。

数字としては低くても、就学以上群よりも未就学群の方が「卵性と膜性」、「出産・育児の準備品」、「授乳法」、「沐浴・入浴法」、「父親への情報」の割合は高くなりました。妊娠中のリスクや管理に関わる膜性については、医療者からの説明と診断が必要な項目であり、多胎児の親が情報として知っておきたいことの一つです。「沐浴・入浴法」については、サークルなどで頻繁に話題になる項目です。しかし、自分たちの工夫でもなんとかできることであり、優先選択項目とはならなかったのではないかと考えられました。「その他」には、「早産について」や「多胎児用の身体発育曲線」という記載がありました。「すべての項目に○をつけたかった」との意見もありました。今回は、母子健康手帳として最も必要だと思うもの3つを選んだ結果であり、決して選択されなかったものが不要だと思われているわけではないと考えます。



多胎児用母子健康手帳に必要だと思う情報

5 現在の（単胎用の）母子健康手帳の記入欄不足や不便を感じる点

「現在の母子健康手帳で、記入欄不足や不便を感じたことがありますか?」という設問には、全体では、「ある」は58人（53.2%）、「ない」は38人（34.9%）、「わからない」は13人（11.9%）でした。

未就学群と就学以上群を比較すると、未就学群は「ない」が32人（52.5%）と半数以上でした。一方、就学以上群は「ある」が7割以上を占めました。

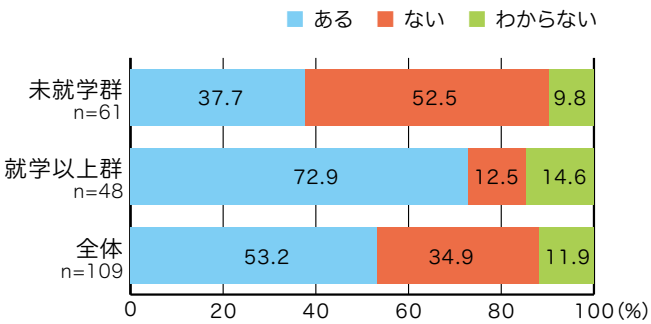
どのような部分で不便と感じるかを複数回答してもらったところ、全体では、「妊娠中の経過の記録」が30人（51.7%）で最も多く、次に「乳児成長曲線」26人（44.8%）でした。

未就学群でも「妊娠中の経過の記録」が13人（56.5%）、次に「乳児成長曲線」が6人（26.1%）でした。

就学以上群では「乳児成長曲線」が20人（57.1%）、次いで「妊娠中の経過の記録」が17人（48.6%）でした。

「その他」の記載では、未就学群では「妊娠中の母胎の記録を2冊同じ事を書くのが面倒」、「任意予防接種の欄が不足」という意見があり、就学以上群では「成長曲線から外れていた」、「単胎用で参考にならない」という意見がありました。

「妊娠中の経過の記録」では、妊娠初期から妊婦健康診査が2週間おきの受診になること、および胎児体重と胎位の記録が2冊の母子健康手帳に記載されるために必然的に欄が不足して



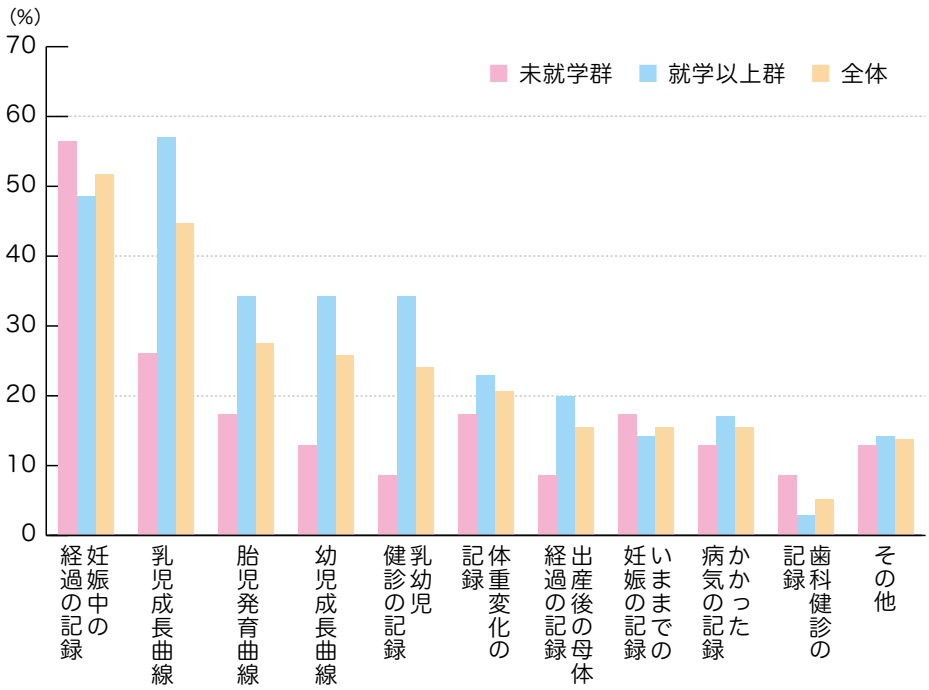
記入欄不足や不便を感じた事がありますか?

いることがうかがえました。「乳幼児健診の記録」も早産や低出生体重で生まれることで、修正月齢計算や細かな経過観察等が必要となり、記録としての欄が不足すると思われました。「乳児成長曲線」の順位が高いのは、多胎児は単胎児よりも小さく産まれるために、成長曲線が参考にならなかったことや、成長曲線から外れていたことで、不安や小さく産んだことへの罪悪感から記入することが嫌だったという心理的要因も影響しているのではないかと考えられました。「単胎の記入用であり、自分の双子妊娠とは比較にならない部分が多く、手帳に記入されるたびに落ち込む気持ちが徐々に増え、母子健康手帳は自分にとって“黒手帳”となった」との記載もありました。体裁として2冊になることの不便さを感じていることや、医療者側が2冊に書くのが面倒で記入してくれなかったという記載もありました。

全体として、「乳幼児健診の記録」、「胎児発育曲線」、「乳児・幼児成長曲線」、「出産後の母体の経過の記録」などの項目で、未就学群で、不足や不便さを感じる人が就学以上群の半数以下になっているのは、母子健康手帳の改編による効果が現れたものだと思われました。しかし、未就学群の4割近い人がいまだに不便を感じているという結果からみて、今後は記入欄の不足や、多胎児であっても、母親が「小さく産んでしまった」、「（私は、あるいは私の子どもたちは）“普通”にはあてはまらない」といった、心理的な記入のしづらさを感じてしまうことがないような工夫が必要であると思われました。

現在の母子健康手帳で不便と感じる部分（複数回答）

	未就学群 n=23			就学以上群 n=35			全　体 n=58		
	順位	（人）	（%）	順位	（人）	（%）	順位	（人）	（%）
妊娠中の経過の記録	1	13	56.5	2	17	48.6	1	30	51.7
乳児成長曲線	2	6	26.1	1	20	57.1	2	26	44.8
胎児発育曲線	3	4	17.4	3	12	34.3	3	16	27.6
幼児成長曲線	6	3	13.0	3	12	34.3	4	15	25.9
乳幼児健診の記録	9	2	8.7	3	12	34.3	5	14	24.1
体重変化の記録	3	4	17.4	6	8	22.9	6	12	20.7
出産後の母体経過の記録	9	2	8.7	7	7	20.0	7	9	15.5
いままでの妊娠の記録	3	4	17.4	9	5	14.3	7	9	15.5
かかった病気の記録	6	3	13.0	8	6	17.1	7	9	15.5
歯科健診の記録	9	2	8.7	11	1	2.9	11	3	5.2
その他	6	3	13.0	9	5	14.3	10	8	13.8



現在の母子健康手帳で不便と感じる部分

6 多胎児用母子健康手帳を作る場合に追加して欲しい項目

未就学群61人中48人、就学以上群48人中42人、全体で109人中90人から何らかの希望がありました。

全体（109人）では「予防接種計画・記録表」60人（55.0%）、「各種相談の記録」47人（43.1%）、「病気・障害の記録」42人（38.5%）が上位項目でした。未就学群でも、「予防接種計画・記録表」が最も多く、61人中33人（54.1%）で、続いて「各種相談の記録」、「病気・障害の記録」が18人（29.5%）、「相談機関の記録」16人（26.2%）、「アレルギーの記録」15人（24.6%）でした。

就学以上群（48人）で最も多かったのは「各種相談の記録」で29人（60.4%）、続いて「予防接種計画・記録表」が27人（56.3%）、「病気・障害の記録」24人（50.0%）、「相談機関の記録」20人（41.7%）、「アレルギーの記録」16人（33.3%）でした。

「その他」には、「受診時の血液検査の記録」、「腹囲測定のグラフ」、「妊婦健診時の双子の胎位を記入する欄」、「修正月齢の考え方・記入欄」、「双子のそれぞれの特徴が書き込める欄」という内容がありました。

予防接種に関しては、インターネットで検索するとブログや質問サイトなどでも多く取り上げられています。2人同時に順調に進めば良いのですが、1人が受けて、もう1人は受けられなかったりすることもあり、アンケート結果では、どの年代も予防接種を実施していくための管理が大変だと感じていることが読み取れました。また、未就学群の方が「予防接種計画・記録表」を強く必要としています。法定の予防接種の種類が年々増えているため、同時接種も多くなり、ますます管理が大変になっていると考えられました。

多胎児は単胎児よりも小さく産まれることが多いため、親は成長や発達に対する不安を感じることがあります。「各種相談の記録」や「病気・障害の記録」が「予防接種計画・記録表」に次いで多いのは、医療機関などに相談した記録を取っておく必要性を感じているからだと思われます。実際に、多胎サークルの中でも病気や障害の診断を受けたという話題は少なからずあります。診断に繋がる相談の経緯を残しておくことは、連携する機関や学校生活などの対応に有効です。

多胎児用母子健康手帳作成で追加して欲しい項目（複数回答）

	未就学群 n=61			就学以上群 n=48			全　体 n=109		
	順位	（人）	（%）	順位	（人）	（%）	順位	（人）	（%）
予防接種計画・記録表	1	33	54.1	2	27	56.3	1	60	55.0
各種相談の記録	2	18	29.5	1	29	60.4	2	47	43.1
病気・障害の記録	2	18	29.5	3	24	50.0	3	42	38.5
相談機関の記録	4	16	26.2	4	20	41.7	4	36	33.0
アレルギーの記録	5	15	24.6	5	16	33.3	5	31	28.4
出産予定病院の連絡先	6	11	18.0	6	14	29.2	6	25	22.9
服薬・投薬の記録	6	11	18.0	6	14	29.2	6	25	22.9
伝達事項の記録	8	6	9.8	9	3	6.3	8	9	8.3
担任名の記録	10	2	3.3	8	4	8.3	9	6	5.5
その他	9	4	6.6	10	2	4.2	9	6	5.5

7 多胎児用母子健康手帳についての自由記載

未就学群、就学以上群、支援者群の3つのグループでは記載項目の有無にばらつきが見られ、内容にも若干の差異が見られました。

ここでは、研究協力者に、多胎妊娠・出産・育児の当事者としての経験に照らし合わせて自由記載を分析、考察してもらいました。次頁の表は、自由記載を4つのカテゴリーとその他の5つに分け、主な内容を群別に記載したものです。自由記載された主なものだけを挙げているので、全体の意見と異なる恐れはありますが、記載された言葉そのものには多胎家庭当事者として共感するものが多く、多胎家庭の一般的な意見として捉えられると予想できました。

手帳についての希望、意見

	（人）	（%）
あ　り	50	41.3
な　し	71	58.7
計	121	100

「多胎児用母子健康手帳に対する希望・意見」については、4割が「あり」と答えていることからも多胎児用母子健康手帳についての関心の高さが示されています。未就学群に関しては母子健康手帳を使う

頻度が高いため、母子健康手帳を身近に感じながらも、その利用については様々な考え方がありました。

双子の年齢を問わず、「手帳の冊数」については、「多胎に関する情報や妊娠中の記録は1冊で良い」という意見でした。重複するものを省けば、かさばらず重さも軽減できることから合理的であると思われます。しかし、「出産後の記録」については、特に未就学群の回答者において「2冊が良い」という意見が複数見られました。その理由として「2人分の命の重さを感じる」、「子どもたちに1冊ずつプレゼントしたい」、「2人一緒の括りにされることに不快感を覚える」、「多胎でも1人の人間」という記載が見られました。これは、未就学群では家庭での養育時間が長く「2人を平等に」、「2人の個々に応じて」と強く意識しながら養育する多胎の親の心情が反映していることがうかがわれました。1冊か2冊かという選択肢を考えるにあたって子どもたちを1人ひとりの人間として扱い、将来残してやれる形にしたいという親らしい願いが感じ取れました。「胎児死亡となるケースもあるため、2冊のほうが良い」との記載は、支援者群で1件のみでしたが、見過ごしてはいけない視点だと思われました。

また、全体で「情報」に関する記載が多く見られたことは、妊娠期から情報不足に陥りやすい多胎家庭の現状を示していると思われました。中でも「早産など妊娠経過とリスク」、「卵性や膜性によるリスクの違い」などについて家族や職場にも理解してもらえるような情報が求められていることからは、多胎妊娠に対する社会の理解の低さを感じていることがうかがわれました。「多胎家庭の置かれている状況を社会に発信する」という観点からも、こうした情報の内容の工夫が望まれるところです。

多胎児用母子健康手帳についての自由記載（主なものを抜粋）

	未就学群	就学以上群	支援者群
冊　数	・連絡先や母体の様子などは現行のものだと2冊に書かなければならないため、妊婦健診の親の情報は1冊で、子の情報は2人分を書き込めるようにしたい ・個々として、1冊ずつ記録を残してあげられた方が良い ・2冊を1冊にすることで不便な問題なども出てくるのではないか ・多胎用として補足的にもらえる形でも良い。あるいは折衷案として妊娠中は1冊、出産後は各々1冊になっても良い	・住所など基本項目や母体については同じことを記入する手間が省けるので1冊で良い ・子の記録については2人分が1冊になっていると持ち運びにも記入にも便利 ・子ども個人を尊重し2冊に分けたい	・多胎の場合、どちらかが胎児死亡になるケースも考えられるため2冊にしておいた方が良い ・母子健康手帳は従来のものを使用し、ガイドブックとして多胎情報の載ったものを渡してはどうか
体　裁		・見開き左右でそれぞれの子の記録ができたり見出しが付いていたりと記入しやすいもの ・保険証・乳児医療証・お薬手帳などがセットにできる収納形態 ・デジタル機器での管理も始まっているので参考にしてはどうか	
記　録	・成長記録、妊婦健診、修正月齢など覚えておきたいことを記入できる欄がもう少し増えても良いと思う	・コメントを書き込める欄があると良い	・保育器に入っていた時の記録や生後1年ぐらいまでの定期健診を記録する欄 ・複写などになっていて2人の発育曲線が2人の母子手帳に並べて記録できると良い ・宅配業者・タクシー・ファミサポなどの電話番号を記載するページがあると良い
情　報	・妊娠期の多胎になる仕組みやリスク、早産についての情報や、出産後の修正月齢が必要 ・発育曲線については多胎用だけでなく、標準値を記載することで、妊婦本人はもちろん父親や家族が客観的に多胎の大変さを理解する目安になるため、こうしたデータが必要 ・転院など受入の病院についての情報を望む ・双子のための育児マニュアルがあると良い。そこに双子ならではのリスクや体験談、産後の育児法など充実した内容を盛り込めば、事前の準備が可能になるのでは	・妊婦だけでなく配偶者を始め家族も多胎妊娠・出産・産後のイメージの獲得のため多胎妊娠の進み方、妊娠中の合併症やリスク、生活に関すること、帝王切開での出産の流れ、産後のNICUやGCUなどでの赤ちゃんの様子、搾乳や沐浴など子育ての体験談、家族の協力についてなどを載せて欲しい ・里帰り出産などを想定しての病院を探す手がかりとしてNICUやMFICUのある病院のリスト、サークルや使える制度のリストなどの情報	・産後受けられる支援や家族のサポート、経験者によるマタニティー用品などの情報が載っていると良い
その他	・多胎児用母子健康手帳のイメージがわかない ・行政が作成したもの以外認められず使えないのではないか。同じような内容だとどちらを使えばよいのか迷いそう	・単胎児と比べたり2人を比べたりしなくても済む多胎育児の状況に合せたもの ・安心できる情報が最小限に絞って読みやすく載っているもの ・多胎家族にとってお守りになるようなもの ・医療職も使いやすいもの ・子ども用なのか母親用なのかターゲットを絞る必要性がある。	

※用語説明　NICU：新生児集中治療室　GCU：新生児回復治療室、成長促進室とも言う　MFICU：母体胎児集中治療室

多胎妊娠に関しての情報の少なさは、多胎家族に不安を残します。多胎となる仕組みの基礎的な説明を望む声や、妊娠期のリスクの細かな説明を望む声は、医療機関による説明不足を示しているとも言えました。

表には掲載していませんが、「妊娠中は初期から1週もしくは2週毎に受診があり、病院等で情報を得たり、相談できるチャンスが多いが、産まれた後には、地域でのフォローがあまりない」という記載がありました。出産後に地域から孤立しやすい多胎家庭の姿が現れていました。妊娠中の情報と共に、出産後の母体の状態や育児法に関する情報の提供が望まれるところです。そうした情報を母親だけでなく育児に参加する父親や家族が共有することは、多胎育児者の孤立感の軽減にも繋がることでしょう。

他の設問の自由記載も含めて、「多胎家庭に対して多胎サークルをもっと紹介して欲しい」という記載が複数ありました。先に述べたように、多胎家庭は出産後に地域から孤立しやすくなります。多胎サークルの代表者は、サークルが多胎家庭を地域につなぐ重要な社会資源だということと、多胎家庭に対する情報の提供が多胎家庭の支援にあたっては重要な要素であることを実感しており、そうした意識を反映した記載だと思われました。

8 母子健康手帳以外で欲しい支援や制度・グッズ（自由記載）

母子健康手帳以外で欲しい支援や制度・グッズについて自由記載してもらったところ、121人中103人（85.1%）から回答がありました。次頁の表に示すようにそれらを、10のカテゴリーに分け、1回の記載につき1点として得点化したところ、①人的支援（114点）、②育児用品の割引や貸出（90点）、③経済的支援（60点）、④アイデア用品（21点）、⑤保育・預かり（16点）、⑥相談（11点）、⑦外出支援（6点）、情報（6点）、⑨産前産後（5点）、⑩その他（5点）となりました。合計で334点となっています。1人が複数の記載をしている場合があるため、実人数を上回る項目もあります。

母子健康手帳以外で欲しい支援や制度・グッズ

	未就学群		就学以上群		支援者群		全　体	
	（人）	（%）	（人）	（%）	（人）	（%）	（人）	（%）
あ　り	53	86.9	40	83.3	10	83.3	103	85.1
な　し	8	13.1	8	16.7	2	16.7	18	14.9
計	61	100	48	100	12	100	121	100

この設問では、回答を促すために多数の例を用意していたために、多少なりとも誘導的な回答になりましたが、内容的には「設問の例にあるすべて」と答えている人が10人もいました。

「人的支援」はすべてのカテゴリー中34.1%（114点/334点）を占めていました。「外出支援」については、多胎に特化した内容と言えます。わずか6点ですが「人的支援」との関連も含めて無視できないカテゴリーです。

ＮＰＯ法人ぎふ多胎ネットが２０１６年３月に作成した『ぎふ多胎家庭白書』によると（http://gifutatainet.com/?page_id=3840　p40～p49）、多胎育児をする家庭では生まれた双子や母親の身体の状態によって生活が一変し、夫婦や家族だけでなく祖父母も巻き込んでの生活にならざるを得ないこと、「外出困難による孤立」、「自分の時間がとれないことのストレス」などが起こると書かれています。現実として育児の手が足りないことを補う「ヘルパー」や「ベビーシッター」、経験者の体験や工夫や地域の情報などを得られる「ピアサポート」は需要が高く、多胎家庭には有効なサービスとなると思われました。

「育児用品の割引や貸出」も全体の26.9%（90点/334点）を占め、出産直後から育児に必要であるばかりか、常に単胎児分の2倍以上の出費になることからもポイントが高くなったと思われます。「経済的支援」は18.0%（60点/334点）でした。さらに、お金に関する内容を「補助や無料・割引・利用券・加算・貸し出し」というキーワードでまとめてみると、全体の69.1%（231点/334点）を占めました。

研究代表者の大木が作成した『多胎児家庭の育児に関するアンケート調査分析結果報告書』（2013.2.22　http://jamba.or.jp/pdf/JAMBA.HPquestionnaire.pdf　p7）でも、「双子の育児の大変さはどのような点だと思いますか?（複数回答）」の設問で乳幼児群、小学生～高校生群、高校卒業以上群それぞれ3割～5割は「経済的な問題」と回答しており、多胎家庭については、工夫してもなかなか

解消されない問題だといえます。

例えば「出産一時金」（子ども1人当たり42万円の支給。双子は84万円の支給）、「就園奨励費」（子どもが複数いる世帯〈多子世帯〉の幼稚園の保育料や入園料が所得に応じて軽減される制度）があります。しかし、多胎家庭にとっては必ずしも経済的な負担軽減に効果があるとは言えず、さらなる支援を渇望していると思われます。

当事者だけでなく支援者の意見としても「育児・家事の訪問型支援」、「ベビーカー・チャイルドシートなどの貸し出し・割引」、「ベビーシッターの無料・割引」などが記載されており、当事者の様子を見ている中でサポートやそれらに関する補助などが「必要」と思われていることがわかりました。

その他には「双子・多胎の家庭に温かく見守ってくれる環境が整うこと、孤独や母親自身が自分を責めることのない子育てができる世の中」という記載もありました。

多胎家庭の現状に対する理解を求める気持ちが表れた自由記載でした。

9 調査・研究に対する意見・質問

全体の3割以上の方が、調査・研究に対するご意見やご質問などを書いてくださいました。研究についての励ましと協力の言葉がほとんどで、研究への期待が感じられました。「一度、全国の多胎サークルの代表の皆様にお会いする機会が欲しい。気軽なランチ会など」という意見もありました。

たくさんの記載をありがとうございました。

母子健康手帳以外で欲しい支援や制度・グッズ

人的支援（114点）	ピアサポート（先輩ママによる訪問や相談）	42
	産前・産後ヘルパーの派遣（無料・割引）	33
	ベビーシッターの派遣（無料・割引）	32
	健診サポート	2
	多胎を知っている専門職	2
	ファミサポ利用券	1
	夜間のヘルパーやシッター派遣	1
	食事の宅配	1
育児用品の割引や貸出（90点）	ミルクや紙おむつの支給 割引	35
	多胎用ベビーカーの貸出	35
	育児用品　貸出・支給	11
	チャイルドシート 貸出	6
	ゴミ袋 貸出	2
	多胎用自転車 貸出	1
経済的支援（60点）	多胎家庭への補助金制度	41
	妊婦健診補助	6
	入園・入学金 支度金 減額・補助・分割制度	5
	妊娠・出産時の医療費補助	2
	妊娠中の通院補助金	2
	整体・マッサージ券	1
	予防接種割引	1
	診察無料券の追加補助	1
	教育費補助	1
アイデア用品（21点）	多胎児用母子健康手帳ケース	13
	双子用抱っこ紐	2
	診察券入れ	1
	軽量多胎児ベビーカー	1
	大きいサイズのオムツバケツ	1
	2人乗り買い物カート	1
	多胎用育児日記	1
	授乳ノート	1
保育・預かり（16点）	一時預かり補助	4
	兄弟児の一時保育 割引・延長	3
	幼稚園保育料割引	3
	保育所多胎加算	2
	育児休業 期間延長	2
	託児の多胎児家庭枠	1
	病児保育	1
相談（11点）	サークル・相談できる場	4
	妊娠中からのサークル情報	3
	専門職の訪問健診・訪問指導	3
	電話相談	1
外出支援（6点）	移動手段補助（タクシー、電動自転車）	3
	外出サポート	2
	健診ピアサポート	1
情報（6点）	多胎冊子 無料配布	3
	情報	2
	ベビーカー情報	1
産前産後（5点）	多胎妊婦学級	2
	退院前の育児練習（家族で）	2
	母体ケア支援	1
その他（5点）	全国イベント	1
	サークルへの支援	1
	地域格差の改善	1
	温かい地球環境	1
	育児用品割引やサービス付きメンバーシステム	1

3. 研究協力者と共に実施した事業

今年度は、調査の検討会議と合わせて、3つの協力団体と共に事業を実施しました。それぞれすでに10年以上の活動実績のあるサークルです。そして、この事業をきっかけに地域での新たな展開が始まりました。その報告を各代表者からしていただきました。

1 「双子が多い町から子育てしやすい環境作りを目指して ～全国の双子の育児支援と保育・教育～」研修会（北海道鷹栖町）

報 告：鷹栖町の双子の育児支援を考える会サロンゆずりは　金森聖美

日　時：2016年7月8日（金）19：00～20：30
場　所：サンホールはぴねす
主　催：鷹栖町の双子の育児支援を考える会サロンゆずりは
協　力：多胎育児サークルハッピーキッズ旭川支部
後　援：鷹栖町、鷹栖町教育委員会、社会福祉法人北海道社会福祉協議会、社会福祉法人鷹栖町社会福祉協議会

（1）鷹栖町の多胎支援の状況

鷹栖町は人口約7,000人ですが、保育･教育機関に18組の双子が在籍しています。過去には多胎家庭に外出介助の育児ボランティアを派遣するなど、小さな町ならではの個別の支援がありました。また、鷹栖町社会福祉協議会からは、多胎育児サークルが当事者だけでは運営が困難であることを理解し、運営相談や関連機関への連絡、会場確保などに協力･支援をいただいています。

「鷹栖町の双子の育児支援を考える会サロンゆずりは」は2015年に「多胎育児サークルハッピーキッズ旭川支部」の鷹栖町在住のメンバーと支援者で構成されました。

ハッピーキッズは2004年に発足した広域のサークルです。10周年記念講演会では、石川県立看護大学の大木秀一教授とひょうご多胎ネットの天羽千恵子代表をお迎えし、双子の育児をしている当事者向けにお話をしていただきました。この講演会をきっかけに翌年には、近隣の東神楽町で多胎支援の育児ボランティア向けの研修会、その次の年には助産師･保健師向けの研修会を開催しました。各研修会は社会福祉協議会（旭川市･鷹栖町･東神楽町）の協力があってこその実現でした。

（2）事業の実施

① 事業の目的（達成目標）

・多くの方々（特に教育関係者）に多胎支援の必要性を知ってもらい、多胎児たちが過ごしやすい環境を整える。
・当事者、支援者、教育者の立場からの多胎支援の体験を紹介し、子育てしやすい環境作りがユニバーサルデザインになることを知ってもらう。

※ユニバーサルデザイン：調整又は特別な設計を必要とすることなく、最大限可能な範囲ですべての人が使用することのできる製品、環境、計画及びサービスの設計をいう。（国際連合「障害者権利条約」、2006年）

② 事業の内容

「双子の多い町」（自称）として、子育てしやすい環境作りを目指すためには、多くの方々に多胎支援の必要性を知ってもらう必要があります。特に今回は、双子に対する継続的なサポートをお願いしたい教育関係の方々にも声をかけました。

鷹栖社協から、教育に携わる鷹栖町内外の小中学校の先生や幼稚園･保育園･子育て支援センターの先生･保育士さんに広報していただき、さらに、「サロンゆずりは」のメンバーが各担任に直接声をかけました。「ハッピーキッズ」からは近隣の市や町の教育機関、子育て支援センター、産婦人科病院などに周知をしました（旭川市内の全小中学校にこの講演会のお知らせが回ったことは画期的でした）。

今回は、以下のように、講演会とパネルディスカッションの2本立てとしました。

【講演会】
「多胎育児支援が必要な理由－当事者とさまざまな職種の連携－」大木秀一先生
【パネルディスカッション】

司会:天羽千恵子さん(ひょうご多胎ネット)
・当事者からの体験発表:「双子の育児体験談、私を救った支援」髙山ゆき子さん(多胎児サークルころころピーナッツ)
・支援する立場からの事例報告:「連携によって救えた命」糸井川誠子さん(NPO法人ぎふ多胎ネット)
・教育に携わる立場から:「保育・養護・教育について、寄り添う親支援、子育て支援は親育ち支援。共感から始まるサークル」中村由美子さん(双子・三つ子サークルグリンピース)

(3) 事業の結果

今回の研修会には、鷹栖町内外の保育・教育関係者、旭川医大、旭川厚生病院などの医療関係者、鷹栖町教育委員会・保健福祉課職員・保健師・鷹栖社協など行政・地域保健・福祉関係者という様々な職種と双子の親の総勢51人が参加しました。鷹栖社協会長の「集う・つながる・作り出す。そこから子育てしやすい町にしていきましょう」の挨拶の言葉に沿うような研修会となりました。

講演会で印象深かったのは、①母親100人のうち1人は多胎の親であり、多胎のうち98%が双子の親であること、②双子の3分の2が二卵性(兄弟姉妹程度に似ている双子)であること、③バリアフリーは障がいのある人や弱者が不自由に感じている部分(バリア)を取り除く対応や構造であり、ユニバーサルデザインは最初から誰にとっても優しい対応や構造であること、そして多胎家庭の支援を考えていくことは健康課題のある人たちに対するユニバーサルデザインにつながること、④当事者と他職種がゆるくつながることが必要で、石川県では多胎ネットが作られ、石川県内のどこにいても妊娠期(母子健康手帳交付時)から同じサポートを受けることができるように取り組んでいること、などでした。

続いてのパネルディスカッションでは、当事者の体験としての「外出もままならず、双子の目標となるラインがわからず不安なのに誰にも聞けずに孤独な日々を過ごしていた。双子のサークルに参加し、やっと自分の思いを受け止めてくれる仲間に出会った。自分を救ったのは人とつながることだった」という発表に、参加したほとんどの双子ママたちは自分の経験を照らし合わせて泣いていました。

支援する立場からの事例報告として、岐阜県では双子を育児中のお母さんに対して、双子育児経験者が支援(ピアサポーター活動)をしており、地域保健や地域子育て支援・行政との連携で、当事者だけではできないきめ細かい対応が可能となっているという話がありました。

そして最後に教育に携わる立場から、いろいろな人が「お互いに集い、お互いに繋がり、お互いに希望を作り出す」支援が大切だという専門職のあるべき姿の話がありました。

3人のパネラーの話のあと、フロアから、思春期の双子についての悩みや、小・中学校の先生からの双子の本音についての質問があり、それぞれについてパネラーからの貴重な助言をいただきました。

最後に鷹栖町長が「双子の育児について当事者の声を聞かないとわからないことがたくさんあった。双子の子育てに限らず、SOSを伝える言葉が大事だと思った。そして、信頼できる人が居る、自分の居場所があることがとても重要であると感じた研修会だった」と締めくくって下さいました。

(4) 事業の効果と今後の展開について

今回の事業では、下記のようにいくつかの効果や変化がありました。

①多胎出産に携わる総合病院の助産師、旭川医科大学看護学科の教授などとつながることができ、9月には旭川医科大学母性看護の学生に、双子の妊娠・出産・育児について、当事者の声を伝える機会をいただきました。また、研修会後に、病院助産師の皆さんが院内の多胎妊婦に向けて配慮をしてくださっているということも耳にしました。

②旭川市子育て支援課と鷹栖社協から「ほっかいどう未来輝く子育て大賞」応募の声かけをいただき、北海道子ども未来推進局へ多胎育児について情報発信する機会を得ました。

③講演会の記事を見た埼玉のFM放送「NACK5」より取材があり、12月13日の双子の日にちなんで「自称、双子が多い町、鷹栖町の多胎育児支援の取り組み」の放送がされました。

④旭川市の「市民と議会の意見交換会」において、大木先生の多胎に関するデータを使ったところ、とてもわかりやすく多胎妊娠・多胎育児の現状と支援の必要性を認識していただけました。平成28年12月の旭川市の議会質問でも取り上げられ、旭川市より多胎育児の不安や外出のリスクへの認識と理解を得られました。

そして、双子のベビーカーが使用しやすい公共施設の間口の検討、旭川市の公共施設の障害者用駐車スペースの使用、多胎妊婦への妊婦健康診査の追加交付の検討、多胎妊娠・育児の相談に対応できる従事者のスキルアップなどを、先進事例研究などを行いながら実現に向けて、支援の充実に取り組むとの答弁をいただきました。

⑤近郊市町村でも多胎の妊娠・育児支援に理解を示してくださる専門職が増えて、ご協力いただけるようになりました。

⑥その他、講演会に参加してくれた小中学校の教員に「相談がしやすくなった」という双子やその親の声もありました。地域的には非常に小さな事かもしれませんが、当事者にとっては大きな一歩でした。

今後、この繋がりを大事に多胎支援の輪を広げ、より深めていくためのネットワークづくりに努め、双子の親が双子の親を支援するピアサポーターの養成を目指します。また、理解と支援協力を得られるよう、行政とのゆるやかな関係を築いていきたいと思います。

(5) 他の多胎支援団体代表からのコメント

この研修会は、近隣市町村に比べ双子の出生率が高いという特徴を表題にすることで、地域住民の関心を集めました。主催であるサロンゆずりはの母体となるハッピーキッズ旭川支部は、子育てサークルとしては長寿の10年を経ています。その歴史と実績は町の社協と非常に良いバランスで連携されてきたことによるものです。

今回は、これまでつながりの薄かった保育・教育の分野の関係者にも声をかけ、様々な立場で熱心な話し合いがされ、町長の参加も得て、ミニ町議会のようでした。特に小中学校の先生方が参加してくださったため、話題が子育て支援にとどまらず「多胎児の思春期」にまで及んだことは大きな成果でした。中学生の多胎児本人を交えて学齢期の多胎支援について話されたことは、全国的に見てもあまり類のない貴重なものでした。

今後はこれまでの実績を活かして、北海道という当事者同士の居住地が離れている場において、どのように他の地域と連携して活動を広げていくのかという課題に向けて取り組まれるとのことです。実際、研修会後に近隣の病院や大学・子育て支援課などと繋がりができ、多胎家庭の現状について啓発する機会を得られています。また旭川市の議会で取り上げられるなど、政策にも影響を与えています。

2 「多胎児ファミリー応援フェスタ」（静岡県浜松市）

報 告：多胎児サークルころころピーナッツ　髙山ゆき子

日　時：2016年9月17日（土）10：00～15：30
場　所：浜名湖競艇場1Fサンホール
主　催：多胎児サークルころころピーナッツ
共　催：NPO法人ころころねっと浜松　　ふたごサークル「ツインクル」
協　力：多胎育児サークル「わんぱく★ソーセージ」　ふたごザウルス
後　援：浜松市　浜松市教育委員会　湖西市　磐田市　K-mix　中日新聞東海本社　静岡新聞社・静岡放送　静岡新聞びぶれ
物品協賛：株式会社都田建設　株式会社WOOD　ヤマヤ醤油有限会社

(1) 浜松市の多胎支援の状況

浜松市は静岡県西部にある政令指定都市です。人口は同県最大で約80万人で、年間の多胎出生数は約90件です。総合周産期母子医療センターである浜松聖隷病院は、双胎間輸血症候群治療などの最先端医療を提供できる事から、ハイリスクな多胎妊婦を全国から受け入れています。

浜松市の多胎支援は、「NPO法人ころころねっと浜松」の育児交流会として保健センターで行われていた多胎児の集いから始まり、これが2006年に「ころころピーナッツ」というサークル活動となりました。当初は月1回の活動でしたが、参加者からの要望もあり月2回へ、その後は妊娠期からの交流につながればと「プレころピーナッツ」も立ち上がり、月3回程の活動になっています。

サークル発足から浜松市による活動場所などの協力を得る事ができ、多胎児家族が参加しやすい環境を作ることができていました。ころころねっと

浜松の「多胎児ファミリー応援活動」では、①母子健康手帳配付の際にお母さん達の声を集めた「ふたご・みつご　子育てBOOK」の配付、②多胎児サークルのイベント情報などを載せた情報紙『ぽっぽ』の発行、③先輩ママが自宅や病院などに出向く「出張相談」、④浜松聖隷病院産科病棟にて月1回「相談サロン」、出産直前の母親達との交流会の開催など、当事者が当事者を支える活動が地道に続けられてきました。現在浜松市には3つの多胎サークルと子育て広場のふたごの日があります。

(2) 事業の実施

① 事業の目的

・訪れた人に多胎妊娠～育児の大変さを実際に目で見て理解してもらう事と同時に、事業に携わる多胎児の家族が明るく前向きな姿である事を知ってもらい応援に繋げる。
・双子の育児の現状と全国の支援の具体例から必要な支援や、多胎支援ネットワークについて学び、これからの地域の支援活動に活かす。

② 事業の内容

「多胎児ファミリー応援フェスタ」は、様々な方の協力のもと、企画からすべて多胎サークルの母親たちだけで取り組んだ「多胎児サークルころころピーナッツ」のサークル発足10周年記念イベントです。

2部構成とし、1部では「体験型イベント」として、参加者が各々に多胎児に対しての理解を深めてもらえるような企画と共に親子で楽しめる企画にしました。2部では、浜松では多胎支援ネットワークがなく、支援の窓口が曖昧なことから、全国の多胎支援団体の報告などを通して、当事者・行政などが考えあう場となるように企画しました。

《第1部：様々な企画・展示》

広いホール正面の舞台上には「ふたごの生活」を再現。ホール中央ではブースを区切って家族で楽しめるフリーマーケットやヘアカット・フォト撮影などの体験コーナー、子ども達だけでも楽しめるかえっこバザール・工作・手芸・くじ引きコーナーを配置。さらに会場内には、一般募集したふたご川柳とふたご・みつご写真を飾り、来場者に楽しんでもらいました。

《第2部：講演会と活動報告・体験発表とパネルディスカッション》

【講演会】

「多胎児家族の現状と支援ネットワークのあり方」大木秀一先生

【全国の多胎支援団体の活動報告・体験発表&パネルディスカッション】

司会:池谷貴子さん（NPO法人ころころねっと浜松理事長）

・体験発表:「双子の育児体験から繋がった支援」金森聖美さん（多胎育児サークルハッピーキッズ旭川支部）
・活動報告I:「多胎妊娠期へのぎふ多胎ネットの取り組み」糸井川誠子さん（NPO法人ぎふ多胎ネット）
・活動報告II:「多胎育児家庭への支援～育児期の支援～」天羽千恵子さん（ひょうご多胎ネット）
・活動報告III:「サークル活動からみた行政との連携」中村由美子さん（双子・三つ子サークルグリンピース）

(3) 事業の結果

《第1部：様々な企画・展示》

1部には、浜松市だけでなく隣接する湖西市、さらに離れた袋井市から実際に多胎妊娠中の家族やサークル参加者、幼稚園の先生、一般の家族など364人が集いました。浜松市のゆるキャラ「出世大名家康くん」と磐田市のゆるキャラ「しっぺい」が会場入り口にて来場者を迎えました。それぞれブースの出入り口を1つにすることで安心して子ども達の動きを見る事が出来るようにしたり、ホールの座席をブース境界線として背面型で設置することで、家族がどこでも自由に休憩したり見学ができるようにしました。「ふたごちゃんの生活」と題したコーナーでは、食器、おもちゃ、ベビー服などの育児用品をすべて2人分用意してふたごのいる生活風景を再現し、訪れた多胎妊娠中の家族などから多くの質問を受けました。

2体のマネキンを用いて単胎妊娠のお腹とふたご妊娠中のお腹を比べるようにしたり、ふたご用の

ベビーカーを実際に押してもらったり、濡れたオムツが詰まったゴミ袋を持ってもらって、訪れた人にふたご妊娠と育児の苦労と大変さを理解していただきました。これらのブースには、聖隷クリストファー大学看護学部准教授の協力により、大学生がボランティアで参加してくれました。学生たちにとっても多胎への関心や理解につながったようです。

《第2部：講演会と活動報告・体験発表とパネルディスカッション》

行政・医療・教育関係者、学生、子育て支援者、当事者など参加者は約50人でした。

来賓の鈴木伸幸浜松副市長の祝辞に続き、大木秀一先生が「多胎児家族の現状と支援ネットワークのあり方」と題して、①多胎出産の動向～多胎に関する基礎データから～、②多胎家庭の現状～多胎育児に関する全国調査～、③地域での多胎支援を考える～ネットワークによる支援がポイント～を全国調査をもとにお話ししてくださいました。多胎育児の精神的・身体的負担の大きさについて解説され、妊娠期～育児期へ切れ目ない支援が大切であることを、行政・専門職の方にも知っていただける講演であったと思います。

続いて、金森さんが自身の育児体験から支援に繋がるまでのお話をして下さり、その大変な育児内容に会場中が一気に引き込まれました。糸井川さんは、支援者と行政・医療等の専門職が互いにできる事を持ち寄った妊娠期からの支援の取り組みを報告され、天羽さんは行政と連携して行われている育児期の支援について話されました。最後に中村さんが行政と連携し協働していくことの重要性を発表してくださいました。

発表後のパネルディスカッションでは、各県の活動状況を相互に確認すると共に、現在の浜松市における取り組みについても話し合われました。浜松では、多胎児サークルはありますが、行政や専門職との連携した支援が出来ていないのが現状です。当事者と行政や専門職との繋がりを作り、多胎家庭支援ネットワークができ、多胎家庭が安心して妊娠・出産・育児ができるよう、継続的で隙間のない支援の実施が今後の課題となりました。

（4）事業の効果と今後の展開について

今回の事業では、下記のようにいくつかの効果や変化がありました。

①H29年6月18日（日）に日本多胎支援協会主催の全国フォーラムを浜松で開催することが決定し、これに合わせて今春「しずおか多胎ネット」を発足することになりました。

②浜松市健康増進課では、「大木先生の多胎家庭の現状の話に驚き、出来ることをしなければと思った」と、イベントでの講演内容について課内で話し合いを設けられ、全国フォーラムへの協力につながりました。また、今後定期的に打ち合わせをして、互いの情報交換をしながら、予防接種手帳や双子冊子の見直し、多胎家庭への同行訪問などの検討をすることが予定されています。

③浜松市子育て支援課が、イベント終了後に浜松市の「はますくヘルパー」事業についての多胎家庭への見直し案をかけ、産前・産後のサポート利用時間（有料）が50時間から100時間に変更されました。

④浜松市議会議員が私たちの多胎支援活動の場に参加し、我々の活動の状況を把握しながら助言を下さるようになりました。より多くの人に多胎支援を知ってもらうことの重要性を一緒に訴えて下さるとのことで、浜松市議会で、多胎家庭の現状を大木先生のデータや講演内容を引用して発表される予定です。

⑤H28年12月に静岡新聞社の取材を受け、H29年1月には記者コラムと夕刊1面のトップ記事の2度取り上げられ、多くの反響をいただきました。

「しずおか多胎ネット」の立ち上げにより、訪問相談・相談サロン・会報誌・育児BOOKなど、浜松での今までの活動すべてが再スタートとなりますが、しっかりと先を見ながら計画し、良いスタートがきれればと思っています。

今後は多胎家庭と行政や支援者とのパイプ役となれるネットワーク作りを目指します。秋に予定する「多胎児ファミリー応援フェスタ2017」では、子育てに関わる人たちが一層楽しめるイベントとなるように企画していきます。

（5）他の多胎支援団体代表からのコメント

本事業はターゲットを絞った2部構成という工夫をされていました。代表を中心としてエネルギーある若いスタッフが多いこのサークルの利点を活かし、第1部は当事者性の高いイベントが行われました。展示や体験ブースの他、実際のオムツやミルク缶などで、多胎家庭の負担が実感できる形で表現された展示もありました。これは多胎の妊婦

教室などでも使えますし、経験者にとっては、自らの経験を肯定的に整理できるものとしても貴重でした。

副市長や市健康増進課、市子育て支援課の方も参加してくださった第2部は、浜松での多胎育児支援を支えてきたNPO団体の代表者をはじめ、複数の多胎児サークルリーダー、医療関係者も集まり、今後の静岡の多胎支援の担い手が揃う形となりました。ここで紹介された妊娠期から育児期への切れ目のない支援は、参加者の大きな関心を呼び起こし、研修会直後に、ヘルパー利用時間の改定がされるなど、多胎支援の推進が図られています。また、今回の事業の運営スタッフとして集まったメンバーを中心に「しずおか多胎ネット」設立の準備もされており、ここに集った人々が連携し、地域に合った多胎支援のシステムを作っていくことが期待されます。

3 「多胎の子育てしやすい環境づくりを目指して ～講演会・勉強会～」（佐賀県佐賀市）

報 告：双子・三つ子サークルグリンピース　中村由美子

日　時：2016年11月12日（土）　1部 13:30～15:00　2部　15:30～17:00
場　所：佐賀市 ほほえみ館（佐賀市保健福祉会館、愛称：ほほえみ館）
主　催：双子・三つ子サークルグリンピース
後　援：佐賀県　佐賀市　佐賀県医師会　佐賀市医師会
　　佐賀県産婦人科医会　佐賀県小児科医会

（1）佐賀県の多胎支援の状況

佐賀県の面積は約2,400㎢、10市10町で構成され、人口は約83万人という小さな県です。大木先生によると、「過去10年間、国内においては最も多胎の出生が少ない県の1つであり、年間の多胎出生数は50～60件である」とのことです。

佐賀県の多胎育児支援の状況は、多胎育児サークルは佐賀市にある当サークル「双子･三つ子サークルグリンピース」のみで、他は唐津市が年に3回ほどの集いの場を保健センターが行っているだけです。

H13年に佐賀市の多胎支援として始まったひろば事業から、H16年に佐賀市が場所や広報などを支援する協働活動として自主サークル（市民運営）「グリンピース」が発足しました。これまでに母親対象の連続講座、父親の子育てを語る会、シンポジウムなどを行い、H28年度は佐賀市から多胎児育児連続講座の委託を受けています。佐賀市との連携には長い月日をかけて育んできましたが、佐賀県全体としてはほとんど何もない状態でした。

今回の事業を開催することになったのは、大木先生の研究の協力団体となり、佐賀が他県と比べて多胎支援が進んでいないと感じたからでした。今の佐賀県では、まず多胎支援の必要性を様々な立場の方に知ってもらうことが大切だと思いました。また、子育ての悩みを共有する勉強会をもち、多胎児の親同士の交流を図りたいと思いました。

そこで、この企画を一緒に行う有志の会を作って呼び掛けたところ、16名ものメンバーが手をあげてくれました。県や市、医師会などにはチラシを持参し、「佐賀県の多胎家庭のためにお力を頂きたい。ぜひ参加して欲しい」とお願いして回りました。有志の会のメンバーのほとんどがこのような経験は初めてでしたが、様々な皆さんとつながることができたおかげで、力をあわせて、無事に講演会と勉強会を行うことができました。

（2）事業の実施

① 事業の目的

・行政、医療、教育、福祉、地域の子育て支援などの支援者への啓発活動
・上記の支援者が連携して多胎支援を行うためのきっかけにする

② 事業の内容

佐賀県ではまず多胎家庭への支援の必要性を知ってもらう必要がありました。そこで、第1部は研究者の講演と、当事者の体験談でより理解を深める講演会としました。そして、第2部は、交流の場がない地域の多胎児の親などにも育児について教え合ったり、悩みを出し合ったりして、共感できるような機会が必要だと思い、「聞きたい!知りたい!

感じたい!　自分だけじゃないよ♡」をテーマに勉強会を企画しました。

《1部：講演会》

・「多胎家庭への支援はなぜ必要か」大木秀一先生
・「多胎の妊娠、出産、育児の事例報告」金森聖美さん（多胎育児サークルハッピーキッズ旭川支部）

《2部：勉強会》

コーディネーター:大木秀一先生
・事例報告者:髙山ゆき子さん（多胎児サークルころころピーナッツ）
・アドバイザー:糸井川誠子さん（NPO法人ぎふ多胎ネット）、金森聖美さん、天羽千恵子さん（ひょうご多胎ネット）、彦聖美先生（金城大学）

（3）事業の効果

《1部：講演会》

行政、医療、福祉、地域の子育て支援者、佐賀女子短期大学の学生、当事者など、約100名の参加がありました。

まず大木先生が「多胎家庭への支援はなぜ必要か」というテーマで、これまでの研究のデータなどをもとにわかりやすくお話しくださいました（講演要旨は、本報告書p17～p18に掲載）。続いて、保健師でもある金森さんより、妊娠期のマイナートラブルや安定期がない妊娠期、双子の出産から育児の大変さ、経済的負担の大きさ、外出の大変さなどの体験事例報告がありました。

データに基づく講演と、実際の体験報告により、より具体的に困難な育児をイメージすることができ、支援の必要性がよく理解されたようで、アンケートには「双子の子育てがこんなに大変だと改めて認識した」、「多胎家庭への支援をいろいろな支援者と当事者が連携していくことが必要」などと書かれていました。

《2部：勉強会》

勉強会では、佐賀女子短期大学の学生に託児を依頼し、参加しやすい環境を準備したところ、多胎児の親ら20人の参加がありました。

まず、髙山さんより、子育て体験の発表がありました。妊娠・出産・育児の壮絶な体験談を聞いて、自分のことと重なり涙する人もいました。続くグループディスカッションでは、髙山さんの体験談の後で、つらい気持ちや体験も話しやすくなったのか、どのグループも時間が足りないほどでした。グループをあらかじめ年齢や性別などを考慮して分けたことで、同じような悩みの共有ができたようでした。アンケートにも「日々忙しくて子育てについて考える時間もあまりなかったので、すごくいい時間が過ごせました。まだまだ子育ては続きますが、これからもがんばっていこうと思いました」、「いろいろな双子ちゃんママのお話を聞くことができてとても勉強になりました」、「これからの成長過程での先が見えたことがとてもよかった」などの記載があり、このような子育てを語れる場が必要だということを実感しました。

最後に、大木先生が「子育ての悩みというと乳幼児の話になりがちだが、悩みは成人を過ぎるまで尽きない。親は普段自分が見ている子どもとは違う部分になると分かりにくいし、見えにくい。母親同士の繋がり、親同士の繋がりを継続的なものにし、何かあれば相談できるグリンピースのような場がやはり必要である」とまとめてくださいました。

（4）事業の効果と今後の展開について

今回の事業では、下記のようにいくつかの効果や変化がありました。

①佐賀県、佐賀市の行政関係者が講演を聞いたことで、改めて多胎支援の必要性が認識され、どんな支援ができるのかを検討していくことになりました。具体的には、保健師など母子保健の研修に多胎支援の内容を盛り込むことや、パーキングパーミット（身体障害者用駐車場を利用する際、利用許可証を発行する制度）の利用期間延長などが検討されるようです。佐賀市では、平成29年度の保育園入所選考で、多胎児には1点が加算されるようになりました。また、佐賀市の母子保健推進員の養成講座を“有志の会”のメンバーが受講し、多胎家庭の訪問をすることになり、健診サポートもできるように準備を進めています。

②講演会に参加してくださった佐賀病院の産婦人科部長から、グリンピースと連携していきたいとのお申し出があり、母親教室後に多胎妊婦さんに残ってもらい、グリンピースの先輩ママとの交流の場を持つことになりました。そのため、福岡県

久留米市で行われたピアサポーター養成講座（一般社団法人日本多胎支援協会主催）を受講したり、ピアサポートの勉強会を実施し、H29年1月から病院内での交流を開始しました。

③“有志の会”を発展させて、平成29年度から、「さが多胎ネット」を発足するための準備を始めます。講演会に参加してくださった方たちと連携しながら、佐賀市から佐賀県へ、多胎支援の活動を広げていこうと思っています。H29年度の、ピアサポート事業、啓発事業、他市でのサークル育成を見据えた多胎育児連続講座開催のための助成金を申請中です。

（5）他の多胎支援団体代表からのコメント

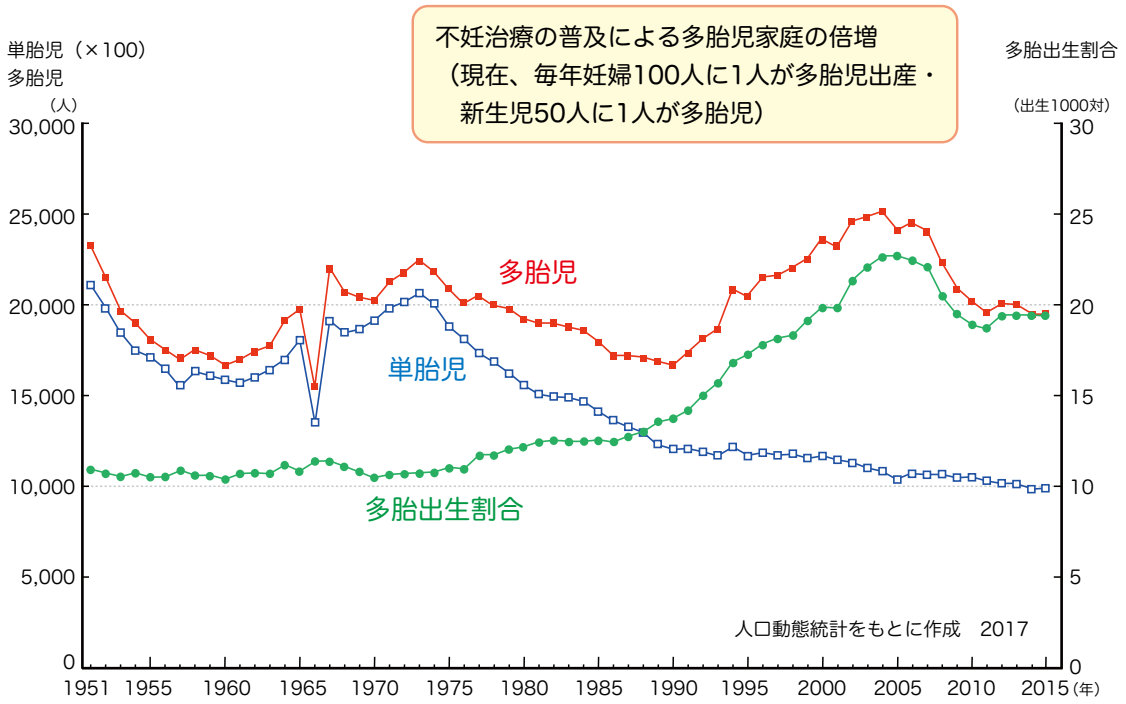
本事業は、講演会と当事者同士の勉強会という2部構成で行われました。第1部の講演会は、佐賀病院産科部長、佐賀県男女共同参画課長、佐賀市福祉課長、県会議員、市会議員など、今後の佐賀県での多胎支援を推進していく時の大きな力となるメンバーが集うなか、佐賀県知事のメッセージ（代読）から始まりました。佐賀県の多胎出産のほとんどを、佐賀病院が担うそうです。報告されているように、この会をきっかけとして、病院での多胎支援の道筋ができたことは大きな成果でした。

第2部の勉強会は、本事業開催のために集まった先輩ママたちが中心となり、子どもが1～23歳という幅広い年齢の多胎ママやパパや祖父母でのグループトークが行なわれました。それぞれが子育ての悩みを語り合い共感し合う中で「仲間」としての結束も強められていきました。

研修会後には、“有志の会”のメンバーが県外まで出向き、ピアサポーター養成講座を受講したうえで、佐賀病院と連携したピアサポート活動を開始しました。支援者として登録したいという声も次々と寄せられているようです。

開かれ始めた医療や県との連携を軸に、ボトムアップされた支援者たちが組織的に活動できるよう「さが多胎ネット」発足に向けた準備が進んでおり、今後への期待が膨らみます。

このように、今年度は3地域で研修会や講演会を行いましたが、こうして多胎支援の必要性を各地で訴え、先進地域のモデル紹介をすることは、それぞれの地域での多胎支援のボトムアップと啓発効果が高いことがわかりました。今後も、その地域に出向き、その土地の人々と直接会って交流する中で多胎支援の風を送り込むことが大切だと思います。



多胎児と単胎児の出生数と多胎出生割合の推移

講演要旨

多胎家庭への支援はなぜ必要か　　大木秀一

「多胎の子育てしやすい環境づくりを目指して ～講演会・勉強会～」（佐賀県佐賀市）から

1．多胎家庭は増えているのか？

単胎児の年間出生数はベビーブームの時で約200万人だったのに対し、現在は100万人である。一方、多胎児の出生割合は不妊治療の一般的な普及により1990年代後半から急増する。単一胚移植の推進により2005年をピークに減少したが、最近は安定している。現在は出産する母親全体の1%が多胎出産で、50人に1人が多胎という状況である。この1%を多いと見るか少ないと見るかが問題である。佐賀県は過去10年間、国内においては最も多胎の出生割合が少ない県の一つとなっている。数値で言うと、年間50～60人の母親が多胎児を出産している。佐賀県は県の形が丸くコンパクトであり、行き来がしやすい環境に思える。多胎出産を扱う病院は限られており、佐賀市にその病院が集中する中で、県内どこからでも通いやすい距離にあるのは魅力の一つだと思う。そして、その病院で多胎育児支援が普及すれば、非常に効果的である。

次に多胎に関する基本的な数字について述べる。2,500グラム未満の低出生体重児は、2015年では単胎では8.2%、多胎では71.2%である。先進国の中で日本は低出生体重児が非常に多い国であり、その中で多胎が占める割合も大きく、対応が急がれている。また、37週未満の早産の割合も、単胎が4.7%であるのに対し、多胎は51.8%と多発する。ただし、単胎と多胎を同じ基準で比較して良いのかという問題がある。言いかえれば、多胎児用の基準が明確に定められていないのである。母子健康手帳も単胎が基準となっており、必ずしも多胎の妊娠・出産・育児にはそぐわない。双子の場合、①乳幼児期の成長や発達は単胎児と異なる（母子健康手帳通りには育たない）、②身長や体重は3～6歳くらいで単胎児に追いつく、③2人に差があること自体は問題ではない。相手と比較せず1人ひとりの成長をみる（3分の2が二卵性なので差がある方が普通）、④しかし、1人だけを見るのではなく、ペアの相手にも関心を向ける（多胎の病気や学校でのクラス分けの時など。海外では双子をどう学校でクラス分けをするかのガイドラインがあるほど）ことが重要になる。

2．多胎家庭の現状

以前実施した多胎家庭の育児に関する全国調査（2010-2011年、本報告書p7で掲載のWebサイトで紹介）では、多胎家庭は、核家族が8割以上、きょうだいが多胎児のみであるケースが6割であった。ここから、核家族で、かつ初めての子育てが多胎である家庭が最大であることが分かる。しかも近くに祖父母がいても、多胎を育てた経験が無い場合が多いため、情報がないと非常に大変な育児になることが分かる。妊娠した時の気持ちでも、驚きや不安を抱いた方が喜びを感じるよりも多く、妊娠初期からの支援が必要になる。また、健やか親子21では、安全で快適な妊娠を打ち立てているが、2010年の段階で妊娠・出産に対して満足していないケースが単胎の場合1割を切っているのに対し、多胎は2割を超えている。その理由には、妊娠などの不安への対応や、医療機関でのスタッフの対応への不満が最も多く、妊娠期からのメンタルサポート、生活支援の必要性が求められる。

一方、夫の援助等家庭環境についての不満は、単胎家庭より割合が低い（単胎家庭では夫の援助等家庭環境への不満が最も大きい）が、これは多胎育児の場合は夫の援助が無ければやっていけないからである。さらに、多胎育児の場合夫の援助が無ければ、育児が破綻する危険が高く、場合によっては、家庭の破綻につながる。実際に多胎家庭は単胎家庭よりも離婚率が高いというデータがある。

また、多胎家庭は身体疲労と経済負担も顕著であり、身体的にも社会的にも負担が大きい育児になっている。特に経済的負担は大きく、双子グッズだからと言って低価格になることはなく、ベビーカーなども単

胎のものよりも高額になり、その現状が施策に反映されることが少ない。さらに、多胎の養育者の3～4割に虐待感があったという結果も得られている。これは多胎育児の過酷さを物語っており、何かのきっかけで誰にでも起こる普通の感情だということである。多胎家庭全体の育児環境の改善が求められる。一方、単胎育児よりも良好な点もある。子育てを通して、「友だちが増えた」、「社会を見る視野が広がった」と回答する人が、多胎の養育者の方が多い結果となった。多胎育児を経験したからこそ周囲とのつながりを増やし、様々な負担を乗り越え社会的にたくましくなっていく様子がうかがえた。

しかし、乳幼児を養育する多胎家庭では育児負担が蓄積している。具体的には、社会的孤立や経済的負担、睡眠不足や腰痛・疲労などの身体的負担、またストレスなどの精神的負担が挙げられる。これらが重なり育児破綻や家庭破綻のリスクが大きくなっている。解決策として、地域で多胎育児支援を考えること、ネットワークによる支援がポイントになる。仲間作り、多職種連携が求められるのである。

3. 地域での多胎育児支援を考える

「多胎家庭」と言うだけでは、①多胎家庭だけ特別扱いできない、②対象家庭が多くない、③支援の必要性が分からない、何を支援して良いか分からないなどの理由から、保健・医療の専門職による組織的な対象になりにくいのが現状である。これまでのように、一部のリスクの高い家庭を支援するのではなく、多胎家庭全体をハイリスクと考えて支援する方が全体的な効果は大きい。そのためには、すべての多胎家庭が少しだけでも育児しやすくなる環境を整えると良い。

そこで活躍が期待されるのが多胎サークルだと思っている。多胎サークルは重要な社会資源であり、多胎育児支援の中心となる。しかし、サークルの必要性を多くの人が感じつつも、運営は困難を伴い、後継者問題、会員数、活動資金、活動場所など、ソフト・ハード両面で外部からの支援が必要である。全国的に多胎サークルへの支援をしている自治体はそれほど多くない状況の中、当事者と専門職がお互いの持つ強みを尊重し、連携できる仕組み作りが必要だと考える。例えば、多胎サークルを中心に、子育て支援、医療、福祉、教育、保健がゆるやかな繋がりを持てると、非常に効果的である。

このようにネットワークの構築により、個別支援から組織的支援が可能となる。育児支援においても、バリアがあるから除くというバリアフリーの発想だけでなく、誰もが最初から利用しやすい制度や環境を整えるというユニバーサルデザイン（本報告書p9に用語説明あり）の発想をもつことで、多胎家庭を特別扱いしない育児支援が実現できる。多胎家庭に優しい社会はすべての人に優しい社会と言える。専門職は「多胎家庭は潜在的に育児リスクがある」との認識を持ち、妊娠期から育児環境を整えることが必要であろう。そして、専門職が、経験豊富な多胎育児支援者の実践知・経験知に理解を示し、お互いの立場を尊重しつつ連携することで、効率的かつ効果的な支援に繋がると言える。今後もその一助を担いたいと思う。

謝　辞

今回の調査にご回答いただきました全国の多胎サークル・多胎の会の代表者、世話役などの皆様にお礼を申し上げます。また、サークル等に配付をお願いした会員用調査票は、調査の性格上膨大な記入項目となりましたが、たくさんの方にご返信いただき、現在も引き続き分析中です。データの入力・整理の作業は、森みちよさんをはじめとする石川県立看護大学のアルバイトの方々が関わってくださいました。データ集計及び図表の作成や本冊子のレイアウト等に関しては、山梨大学の大間敏美さんにご協力をいただきました。

本冊子の刊行に関する助成

平成28年度 石川県立看護大学学内研究助成金 研究プロジェクト助成
「多胎育児当事者のニーズと科学的根拠に基づく多胎児用母子健康手帳の開発」